



特集

地域に生きるびんリユース

若い人をターゲットに6年前に誕生した新リターナブルびん「Rドロップス」。商品化をめざし進化を遂げて、現在、中身にサイダーやお茶が入れられて活躍中です。地域に根差したびんリユースの扉を開いた「Rドロップス」の広がりが期待されます。

平成19年に誕生した「Rドロップス」の印象について、66%が「おしゃれ」「かっこいい」「斬新」という回答。

びんリユースの普及啓発に取り組んでいるびん再使用ネットワークが、学生やNPOメンバーらと共同で「Rドロップス」を開発したのは6年前のこと。軽くて、持ちやすく、スタイリッシュで携帯可能ということで、今までにないリターナブルびんの誕生でした。開発当時に実施したテスト販売時のアンケートでは、大学生を含む消費者の66%が「おしゃれ」「かっこいい」「斬新」と回答。とくに女性の回答が80%近くあり好感度の高いリターナブルびんであることがうかがえました。さらに「このびんに入った商品が発売されたら買う?」という質問に対しては、「買う」が22%で、「中身が気に入れば買う」が75%という回答でした。

その5年後には、中身の充填に配慮して開発された「Rドロップス2号」が完成。進化した「Rドロップス」を使って、新宿区商店会連合会の「十万馬力新宿サイダー」、福井県池田町の「いけソーダ」、奈良県の大和茶「と、わ(To WA)」が次々と登場し、現在、それぞれの地域で活躍しています。



▲ テスト販売されたRドロップス入りぶどうジュース



▲ Rドロップス2号

Rドロップスによるびんリユースに求められるのは、地域に根差したシステムづくりと継続させる体制づくり

現在商品化されている「Rドロップス」入り飲料については、それぞれの地域経済の活性化にふさわしいツールとして販売されています。「十万馬力新宿サイダー」は、新宿区にある手塚プロダクションの「鉄腕アトム」をキャラクターに採用。「いけソーダ」は福井県池田町の湧水を使ってサイダーを作り、また「と、わ(To WA)」は、奈良県産の大和茶を使っています。いずれも地域特性を盛り込みながら、リターナブルびんとしての環境優位性をプラスすることで、その地域をしっかりアピールしていることがうかがえます。

びんリユースの未来に向けて、今後は第4、第5の「Rドロップス」入り商品が登場していくことが求められ、さらに、その一つ一つにおいて地域に根差した流通システムが組まれ、それを継続していく体制が作られていくことが大切です。若い人たちのアイデアをもとに開発された「Rドロップス」が次世代の人たちに理解され、新しいびんリユースの輪が広がっていくことが強く望まれます。



▲ Rドロップス入り飲料「十万馬力新宿サイダー」(左)
「いけソーダ」(中)・「と、わ(To WA)」(右)

「Rドロップス」入り商品の状況

奈良県 大和茶「と、わ(To WA)」

奈良のお茶で作って、奈良で飲んで、奈良でまわす！

「Rドロップス」に入った大和茶「と、わ(To WA)」は、まさに地域循環型商品。



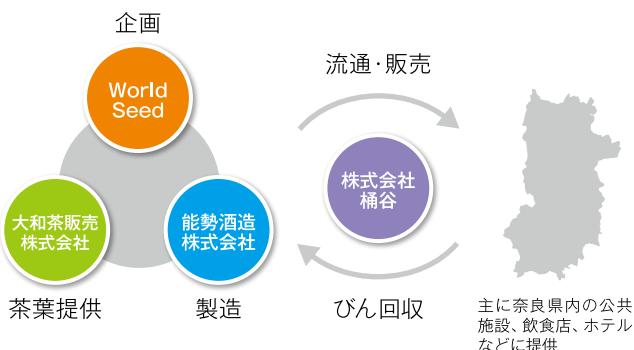
NPO団体「World Seed」が構築したネットワークにより、今までになかったリユースびん入り大和茶が誕生！

大和茶「と、わ(To WA)」は、若いメンバーで構成されたNPO団体「World Seed」により、企画・開発されました。「World Seed」は、さまざまな分野の団体とネットワークを構築し、社会的なムーブメントを起こすことを目的に活動しています。

「World Seed」では、リユースびん入り商品のメインターゲットを公共施設にしていたことから、企画段階で、奈良県生駒市の環境政策課にアドバイスを求めました。出された注文は、奈良にこだわった中身で、会議で飲みきれるびんサイズ。そこで、大和茶を容量220mlの「Rドロップス」で提供することになりました。

「と、わ(To WA)」の事業構成は、茶葉の提供が大和茶販売株式会社、製造が能勢酒造株式会社、販売とびんの回収が株式会社桶谷で、そのネットワークを構築しているのが「World Seed」です。

■ リユースびん入り大和茶「と、わ(To WA)」の販売ネットワーク



「和・環・輪」をつなぐ「と、わ(To WA)」は、「環境」と「地域」を結ぶ奈良の新ブランド商品。

「と、わ(To WA)」は、リユースびんの環境的な意義と奈良県の特産品使用による地域的な意義が融合した、まったく新しい商品です。「和」をもって「輪」をなす大和茶と「環」をもって「輪」をなすリユースびんの結びつきは、悠久の歴史から受け継がれてきた文化を伝え、「環境」と「地域」をつなぐ新しい社会の実現を目指しています。それが、「と、わ(To WA)」という名称に託されています。

「と、わ(To WA)」のデザインコンペティションを開催。84の応募作品の中から最優秀作品1点を選出。

より広く「と、わ(To WA)」の登場をアピールするために、「World Seed」は、「容器グラフィックデザイン・コンペティション＆展覧会」を開催。当協議会もこのイベントに協賛しました。全国より84作品の応募があり、そのすべてを奈良県立図書情報館に展示。来場者にも審査をしていただき5作品を選出した後、昨年9月22日の公開プレゼンテーションにおいて最優秀作品を選出し、「と、わ(To WA)」のパッケージデザインとして採用しました。



▲「と、わ(To WA)」のデザインコンペを告知するチラシ



▲デザインコンペ最優秀賞の表彰式



生駒市 副市長
小紫 雅史氏

「と、わ(To WA)」は、びんの環境特性以外に、デザインや中身のおいしさなどが魅力的！

私は公募で生駒市の副市長になる前、15年ほど環境省において、廃棄物処理法の改正や容り法の改正に関わってきたこともあり、びんリユースにおいて、流通システムの構築が難しいことは知っていました。「と、わ(To WA)」の取り組みの話を聞いたとき、流通システムの連携が整っていたので、うまくいくだろうと思い、生駒市としてお手伝いさせていただくことにしました。

「と、わ(To WA)」の魅力は、リターナブルびんに入っていることはもちろん、奈良のお茶を使っていて中身がおいしいこと、びんの形状もパッケージデザインにもこだわっていることなどで、すばらしい付加価値を持っていると思います。生駒市では、環境対策と経済振興と一緒にやっていくという動きがあり、昨年立ち上がった環境経済部にとって、「と、わ(To WA)」の採用は第一弾のプロジェクトとなりました。

市の会議やイベントなどで、「と、わ(To WA)」を使っています。この取り組みでグリーン購入大賞の優秀賞を受賞しました。

最初に「と、わ(To WA)」を使ったのは、昨年11月に開催された「環境首都創造自治体全国フォーラム」のこと。「と、わ(To WA)」採用のトップバッターでした。参加した全国の自治体の方々に、リユースびん入り大和茶をアピールできたと思っています。現在は市の会議や市が開催するイベントなどで、状況に応じて使うようにしています。また役所内の売店でも扱っています。

生駒市では、この「と、わ(To WA)」の活用事例で、今年の「グリーン購入大賞」に応募しました。書類選考を通過して、審査員の前でプレゼンテーションを行った結果、「優秀賞」をいただきました。この受賞は、環境都市としての生駒の知名度やブランド力をいっそう高めることができたと考えています。今後は、「と、わ(To WA)」を生駒の街づくりにつなげていきたいと考えています。



▲グリーン購入大賞プレゼンテーション

奈良県内の公共施設、ホテル・旅館、飲食店などで、着実に「と、わ(To WA)」の採用が増えています。

昨年の11月に誕生した大和茶「と、わ(To WA)」は、公共施設、ホテル・旅館、飲食店などを販売マーケットとして、着実に販売を増やしており、普及拡大に向けてさらなるアプローチを続けています。

現在、地方公共団体では、奈良市と生駒市の2市が導入。会議やイベント等で使用するとともに売店でも販売しています。ホテル・旅館は10軒、飲食店は約40店舗で販売しています。

「と、わ(To WA)」を利用したオリジナルカクテルが好評な「ピツツアリア・バー・ボーノ」では、お客さまの大和茶の注文に、びんに入ったままの「と、わ(To WA)」を提供。オーナーの宮中氏いわく「奈良県のお店だから差別化を図ろうと思い導入しました。個性ある大和茶をびん入りにしたところが素晴らしい!」とのこと。



▲「と、わ(To WA)」を割り材にしたカクテル

また、平成25年9月には、中央環境審議会循環型社会部会容器包装の3R推進に関する小委員会および産業構造審議会産業技術環境分科会廃棄物・リサイクル小委員会容器包装リサイクルワーキンググループ第1回合同会合の会議用飲料として、「と、わ(To WA)」が席上に置かれました。



▲容り法に関する審議会の会議用飲料に



▲奈良青年会議所主催イベント「まほろばざーる2013」に出展



大和路・吉野山 観光旅館
佐古家
大村 次康氏

コンペの会場で、「と、わ(To WA)」に遭遇!
デザインもよくて環境にもいい!見事です。

「佐古家」は江戸時代中期より280年以上続いている吉野山でもっとも古い旅館で、現在14代目となっています。

実は、「と、わ(To WA)」を知ったのは、昨年の9月、デザインコンペが行われた奈良県立情報図書館のこと。「なんや、これ! 大和茶! おもしろいな~」というのが第一印象。いろんなデザインが展示されていて、どれが選ばれるのか楽しみでした。

「と、わ(To WA)」を採用したのは、デザインがいいのと中身が大和茶であること、それとびんがリユースできるという理由からです。私は、常々、使い捨てに疑問を抱いていたので、リターナブルびんというのは魅力がありました。今年の3月よりすべてのシーンを「と、わ(To WA)」に切り替えております。当旅館で行われる会議や宴会で使っており、また各部屋の冷蔵庫の中にも「と、わ(To WA)」が入っています。お客さまに好評ですよ。

「と、わ(To WA)」の取り組みが、「グリーン購入大賞・優秀賞」と「リデュース・リユース・リサイクル推進協議会会長賞」を受賞。

平成25年1月より、「と、わ(To WA)」を導入した生駒市では、平成25年度グリーン購入ネットワーク(GPN)主催「第15回グリーン購入大賞」に「公共施設における会議等でのリユースびん入り商品導入を通した率先した環境行動推進の取り組み」として応募。「優秀賞」を獲得しました。12月13日には、東京ビッグサイトで開催される「エコプロダクツ展」で表彰式と事例発表が開催されます。

また平成25年度リデュース・リユース・リサイクル推進協議会主催の「リデュース・リユース・リサイクル推進功労者等表彰」では、「会長賞」を獲得。10月29日にKKRホテル東京で表彰式が行われました。



▲「リデュース・リユース・リサイクル推進協議会会長賞」の表彰式

人と人を結びつけて広がっていく「と、わ(To WA)」は、びんリユースの新しいビジネスモデルとして期待される。

「と、わ(To WA)」の誕生から1年余り、NPO団体「World Seed」の若い力が核となり人と人を結びつけ、その輪が広がっており、びんリユースの新しいビジネスモデルとして大いに期待されています。

今後の展開としては、全国の公共施設に向け、「と、わ(To WA)」による「地球環境負荷の低減」と「地域経済への振興」を広くアピールしていくことをする動きがあります。現在、その推進体制を強化するために、奈良県におけるびんリユース推進協議会(仮称)の立ち上げが予定されています。



環境省 廃棄物・リサイクル対策部
リサイクル推進室・室長補佐
水信 崇氏

商品企画からデザインまで、
若い人が関わっていることに意義がある。

リターナブルびんが減少してきている状況において、「World Seed」という若いメンバーの団体が「と、わ(To WA)」を企画・開発したこと、若いデザイナーの作品がコンペで採用されたことなど、とても意義あることですね。「と、わ(To WA)」の登場は、ムーブメントして非常にパワーがあるというのが正直な感想です。

「と、わ(To WA)」が広く流通していくためには、まずは国をはじめ自治体や独立法人、地方公共団体における会議等で採用して認知してもらうことが大切です。また自治体の購買部や旅館、飲食店等のチャンネルを増やしていくことが重要で、さらに大量に使うことで単価を下げていく取り組みが広がることが望まれます。環境省では、まずは自分たちからということで、9月に開催された容り法の審議会で「と、わ(To WA)」を採用しましたが、今後も引き続き検討していきたいと考えています。

「Rドロップス」入り商品の状況

福井県池田町 池田のサイダー「いけソーダ」

エコな町、池田町で、地元の湧水を使った「Rドロップス」入りソーダが誕生。
あきびんをお店に戻すと50円返金されるデポジット制度を採用。



くり返し使えるリターナブルびんに入った「いけソーダ」は、池田町の環境まちづくりにふさわしいエコな商品。

福井県と岐阜県の境に位置する小さな山里、福井県池田町で、昨年の春、「Rドロップス」に入った池田のサイダー「いけソーダ」が誕生しました。開発したのは池田町役場が出資する株式会社「まちUPいけだ」。中身は町が手掛ける湧水のミネラルウォーター「ままの水」を使い、後味すっきりの飲みやすい微炭酸のサイダーに仕上げています。

米どころでおいしい野菜を生産していることで評判の池田町で農業が盛んなのは、まさにその地を流れる水がいいからです。「いけソーダ」は、そのおいしい水をたくさん的人に味わってもらい、広く池田町をアピールしたいということで開発されました。「Rドロップス」の採用は、福井県のご当地サイダー「さわやか」のメーカー「北陸ローカルボトリング協業組合」の紹介によるもので、ここで「いけソーダ」の充填とあきびんの洗浄を行っています。

池田町では、環境行動をポイント化する「エコポイント事業」、廃油をリサイクルして使う「エコキャンドルイベント」、家庭の生ごみを牛糞と混ぜて堆肥によみがえらせる「食Uターン事業」、化学肥料や農薬に頼らない「ゆうき・げんき正直農業」など、さまざまな環境に対する取り組みが行われており、過去には「自治体環境グランプリ」で最優秀の環境大臣賞も受賞しています。くり返し使えるリターナブルびんに入った「いけソーダ」もまた、池田町の環境まちづくりにふさわしいエコな商品と言えます。



▲「いけソーダ」を販売している「こってコテいけだ」

池田町内外10店舗で「いけソーダ」を販売。
今後、中身のバリエーション展開が期待される。

「いけソーダ」は飲んだ後に、あきびんをお店に戻すと50円返金という仕組みになっています。現在、町内の観光物産店「こってコテいけだ」の他、福井市内のショッピングセンターにある池田町のアンテナショップ「こっぽい屋」、東京の銀座にある福井県の観光物産店「食の國福井館」など、町内外合わせて約10店舗で販売。また町内の温泉旅館「冠荘」では、宴会などに使用しています。



実は、この「Rドロップス」のびんには商品名が入っておらず、「池田」という漢字表記とその周りを囲む「NATURAL MINERAL WATER」という英文字によるシンプルなデザインになっています。その理由は、このびんに池田の湧水を使った中身をいろいろ入れて、バリエーションを増やしていくこと、将来を見越してのこと。まさにどんな中身にも対応してくり返し使えるRマークびんならではの使用方法といえます。今後の商品展開としては、紫蘇(シソ)のソーダや甘酒のソーダなどが摸索されているようです。



▲「こってコテいけだ」(左)と「食の國福井館」(右)で販売されている「いけソーダ」



まちの市場 こってコテいけだ
店長

宇野 嘉秀氏

お買い求めのお客さまには、
リターナブルびんの説明をしています。

町内唯一の観光物産店である「こってコテいけだ」は、スーパーもコンビニもないこの町の方々にも、便利に利用していただけるよう、暮らしに役立つさまざまな食材を置いています。

飲料コーナーにある「いけソーダ」は夏場を中心に売れ、この夏は1日50本ほど出ました。お買い求めのお客さまには、その都度、このびんがくり返し使えるリターナブルびんであることを説明し、あきびんを戻してくれたら50円返金することを伝えています。ただし、びんのデザインがいいからでしょうか、戻ってこないこともあります。「いけソーダ」の発売から2年が経ちますが、今のこどもたちが大人になつても、この商品が残っているどうれしいですね。商品サイクルが短い時代ですが、「いけソーダ」は息の長いびん入り商品であつてほしいと思っています。



株式会社まちUPいけだ
赤坂 晃治氏

選んだ理由は、飲みきりサイズと口当たり。
びんリユースという社会的な価値が大切!

「まちUPいけだ」の使命は、池田町の特産品で商品を開発して世に送り出すことですが、このソーダが果たして売れるのかどうか、非常に不安でした。昨年4月の発売以来さまざまなメディアで取り上げられたのも、この「いけソーダ」という呼び名があつてのことだと思っています。

「Rドロップス」を採用したのは、飲みきりサイズでちょうどいいということ。それと他素材容器とは違う口当たりの良さ。さらに便利さばかりを追求するのではなく、リユースという社会的な価値を大切にしたいという思いからでした。

今後の展開としては、商品バリエーションの拡大や福井県内外でのイベント等における限定販売を考えおり、さらにリターナブルびんであることをアピールして、リユースの推進に貢献していきたいと思っています。



今までになかったリターナブルびん「Rドロップス」の開発に携わって…



びん再使用ネットワーク代表幹事
びんリユース推進全国協議会 運営委員会
中村 秀次氏

**学生と市民団体とガラスびんメーカーといっしょに、
スタイリッシュなリターナブルびんを開発しました。**

6年前に今までにない新しいリターナブルびんを開発したのは、リサイクルと言えばペットボトルと思っている大学生が非常に多いことを知ったのが、きっかけでした。それならば、大学生に受けるかっこいいリターナブルびんを作つて、持ち歩いてもらおうと思い、大学生や市民団体に呼びかけてプロジェクトを結成しました。さらにガラスびんメーカーに協力していただき、リキャップできて軽くてスタイリッシュなデザインという理想的なリターナブルびん「Rドロップス」が完成しました。

しかしながら、なかなか商品化に至らない状況を踏まえ、ライン適正やP箱適正を考慮し、どんな中身にも対応できる形状に進化させた「Rドロップス」2号を開発しました。それが「と、わ(To WA)」や「いけソーダ」のびんというわけです。この「Rドロップス」は、さまざまな地域で特産物と結びついて、地域の人に愛されながら、環境にいいリターナブルびん入り飲料として広がっていくことを期待しています。教育の場や公共施設などで「Rドロップス」入り飲料が採用されていくといいですね。



▲初代「Rドロップス」を紹介するチラシ



東洋製罐グループホールディングス株式会社
マーケティングセンター
業務・関連事業グループ
村井 孝嘉氏(左)

東洋ガラス株式会社
営業本部 営業企画部 企画開発課
八百幸 玲氏(中) 大越 壮一郎氏(右)



**「炭酸でもお茶でも入れられるびんを!」の要望に、
試行錯誤を重ねて「Rドロップス」2号を設計しました。**

東洋ガラスでは、「若者に受け入れられる軽くてスタイリッシュなリターナブルびんを作りたい」という、びん再使用ネットワークの要望を受け、何パターンかのびんデザイン案を作成して、大学生たちに選んでもらいました。決まったのは零のような形状の案で、それに「Rドロップス」というネーミングをしたのは大学生でした。こちらからは、若い人にリターナブルびんの環境性を伝えるために、地球温暖化の象徴として当時注目されていたペンギンマークの刻印を提案し受け入れられました。また、Rマークの横には「RETURNABLE GLASS BOTTLE」という英文字を刻印しました。商品化をめざした「Rドロップス」2号の開発では、「炭酸でもお茶でも何でも入れられるリターナブルびんにしたい!」という要望に応えるために、試行錯誤を重ねましたが、スタイリッシュな零の形状は踏襲して、汎用性の高いリターナブルびんを完成させました。



▲「Rドロップス」に刻印されたペンギンマーク

ガラスびんメーカーとして、さまざまな地域での「Rドロップス」の活躍を期待して、後方支援を続けていきたいと考えています。



「Rドロップス」は、出会いを広げてくれるびん! ビン笛合奏団 Laマーズ

**南三陸の仮設住宅でビン笛コンサートを続けています。
「Rドロップス」を吹くおばあちゃんの笑顔が忘れない!**

「Rドロップス」との出会いは、3年前に町田のリユースイベントで出たときで、記念に何本かいただきました。第一印象はペンギンのマークが可愛い! それと、びん口を指ではじいて音を出す奏法にフィットしていること、吹いてもいい音が出ること、さらにネーミングも素敵で、すぐに愛着がわきました。

昨年の11月と今年の8月に、南三陸の仮設住宅でビン笛の体験を含む参加型のコンサートを開催したのですが、その時に「Rドロップス」を使いました。夢中になって「Rドロップス」を吹き続けるおばあちゃんがニコニコしていたのが忘れられません。

「Rドロップス」は、まさに出会いを広げてくれるびんです。いっしょにビン笛を吹いたことで、初めてあつた人とも仲良くなれるんです。また次回、南三陸に行ったときにも、たくさんの人々に「Rドロップス」でビン笛を体験してもらって、たくさんの笑顔と出会いたいと思っています。



▲「Rドロップス」を吹くLaマーズ



▲「Rドロップス」を吹く仮設住宅の皆さん



▲コンサートの後でびんをデコレーション



環境省のリサイクル推進室の関係者に向けて、カレット工場とガラスびん工場の見学会を開催。

環境省大臣官房 廃棄物・リサイクル対策部 企画課リサイクル推進室の関係者の皆さんに、カレットとガラスびんの製造現場を体験していただく工場見学会を、8月19日に開催しました。

カレット工場は龍ヶ崎市の硝和ガラス株式会社で、ガラスびん工場については東洋ガラス株式会社千葉工場で実施。夏の暑さの中、それぞれの製造工程をまわり、ガラスびんリサイクルについて理解を深めていただきました。また見学会終了後には、当協議会会員メンバーと意見交換会を開催。容器包装リサイクル法の見直しに関する話題など、活発に意見が交わされました。



▲ 硝和ガラス株式会社



▲ 東洋ガラス株式会社千葉工場

神奈川県厚木市の小学校で、ガラスびんの3Rに関する出前授業を開催

NPO法人かながわ環境カウンセラー協議会と東洋ガラス株式会社によるガラスびんの3Rに関する出前授業が、9月26日に厚木市立鳶尾小学校で実施されました。

授業を受けたのは、6年生の2クラスで、当協議会の「くるくるくるくる ガラスびん」のポスターを使い、ガラスびんの原料、リターナブルびんやワンウェイびんなどをポスター上に置きながら、びんのリユースやリサイクルの流れを学びました。



のリデュースについては、軽くなった牛乳びんで、軽量化前後で内容量が変わらないことを、実際に中に水を入れて溢れないことで確認しました。

また、ワークシートでは、ガラスびん3Rの復習に加え、毎日の生活の中で3Rを自ら実践して地球温暖化を防止することについて学びました。

▲ 授業で使われた当協議会のポスター



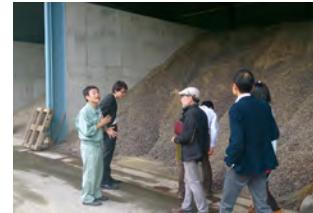
▲ 出前授業風景



▲ 牛乳びんの比較

大学関係者に向けてカレット工場の見学会を開催し、ヒアリングと意見交換会を実施。

容器包装リサイクル法審議会委員の神戸大学石川教授をはじめとする大学関係者に、関東と関西のカレット工場を見学していただき、ガラスびんリサイクルに関するヒアリングと意見交換会を実施しました。見学していただいたのは、10月7日に龍ヶ崎市の硝和ガラス株式会社、10月18日に西宮市の株式会社山一商会で、高品質なカレットが製造される工程を体験していただきました。



▲ 株式会社山一商会

3R推進団体連絡会主催の「2013年容器包装3R連携 市民セミナー」を開催。

3R推進団体連絡会は、11月15日に、新宿区立四谷区民ホールにおいて、「2013年容器包装3R連携 市民セミナー」を開催しました。今回のセミナーは、「3Rにまつわる情報をわかりやすく、興味を持っていただけるよう伝える工夫」というテーマで、3Rの推進について多彩なプログラムが用意されました。

第一部は、3R推進団体連絡会の活動報告の後、川崎市のごみ分別回収方法に関するわかりやすいリーフレットの紹介と講演、3R市民リーダーによる3R出前講座の実演と講演が行われました。第二部は林家時蔵さんによる環境落語「笑って身につくエコライフ」と「3Rと落語」をテーマにした対談。第三部のパネルディスカッションでは、セミナー来場者と事業者がQ&Aを通して意見を交わしました。



▲ パネルディスカッション

びんリユースのムービーが完成! 12月より当協議会のホームページで公開中。

ペンギンを主人公にしたびんの3Rムービー3部作の第2弾、「めぐりめぐるリユースストーリー また会おうよ!リターナブルびん」が完成しました。物語は、探偵ペンギンが昔活躍した「リターナブルびんコーラス隊」を探し出し、エンディングでリターナブルびんたちが大合唱するという内容です。合唱曲の作詞作曲は「ビン笛合奏団Laマーズ」で、コーラスにも参加しています。またゴスペルシンガーの迫力ある歌声が合唱をさらに盛り上げています。

12月より当協議会のホームページで公開中ですので、ぜひご覧ください。トップページのバナーより、ご覧いただけます。



▲ ムービーのイメージ画像